2010年
（平成22年）
8月1日
日曜日

こもろまん編集部
発行所：小諸市CC
komoroman@vanotica.net

創刊号

小諸に集まる想い――ロマン

# 日盛俳句祭開催

## 俳句の暑い夏が今年も始まりました。

俳句はロマンだ。詠む人の想いは、五・七・五の十七文字に託され、俳句となる。きっとそこには、詠み人の熱い想い、ロマンが詰まっている。私たちはその十七文字に心動かされ、深い感動を覚えることもあるだろう。たった十七文字、されど十七文字。短いからこそ伝えることのできる「想い」があるのも俳句の魅力かもしれない。また、俳句の中には様々な情報が含まれている。詠んだ場所や、季節。はたまた、誰とその場所にいたかをも知ることができてしまう。更に自分の感じた想いなどがプラスされ、一句の俳句として完成するのである。その俳句は時代を越え、現代の生活を送る我々に深い感銘を与えることもある。交わるはずのなかった過去の人との関わりを与え、違う場所・違う時間軸にいながらでも、過去の俳句を詠むことで、あたかもそこにいるような錯覚を覚えてしまう。ここ小諸ゆかりの俳人、高濱虚子の俳句に魅せられ、この地を訪れる人も多いだろう。

その高濱虚子に関する、面白いエピソードがあるのはご存じだろうか。虚子は、もちろん俳人として人気があるだけでなく、熱狂的な女性のファンも多かったといわれている。彼のもとには多くのラブレターや贈り物が毎日のように届けられていたらしい。中には菊の花びらを乾燥させたものを枕に詰め、長寿を願って虚子に送った女性もいるという。実は、その女性こそが俳人、杉田久女なのである。ここにも俳句を通じて抱かれた人のロマンを感じることができる。八月一日（日）～三日（火）の三日間にわたって開催される小諸日盛俳句祭に、慶應義塾大学加藤文俊研究室のメンバーでお邪魔させてもらう。様々な形があるにせよ、ここにも人それぞれのロマンがあるはずだ。私たち編集部が発行する『こもろまん』は、日盛俳句祭に関する話題をわたしたちなりの視点で、朝夕一日二回、合計五回の瓦版として発行する。私たちはいわば、俳句に関してはド素人である。しかし、素人だから思うこともあるはずだ。その思いを文章にし、瓦版『こもろまん』を通して、小さなロマンを見逃さず、みなさんに伝えていきたいと考えている。また、みなさんのロマンを聞かせてもらうことで、私たちなりの「ロマン」を考えてみる良いきっかけとしたい。（神通）

ロマン小説　第一話

## すみれ

ここは坂のまち、小諸。生い茂る草木、豊富な緑から夏の日差しが差し込み、私を照らし出す。じんわりと汗がにじむ。蝉の声にはっと気付き、目を覚ます。

「そうか、もう夏か…」

夏が来たのだ。このまちに来て、初めての夏を迎える。ほんの半年前までは、都内の大企業に勤めていた。家庭を持ち、仕事も上々で、それなりに充実していた。家族のために働き、私はどんなに幸せな生活を送っていただろう。しかし、何かが違った。私が欲しいのは「家庭」でも「仕事」でもない。私は何かに燃えたかった。妻も子も愛していたが、きっともっと他の"何か"に…。私は仕事を捨て、妻と子を東京に残し、単身で小諸を訪れた。小諸は私にとって、幼少期を過ごした故郷である。そうして故郷の地、小諸で新たな生活が始まったのである。

蝉の声を聞いていると、あの夏の思い出が蘇る…。再び目を閉じると、まるで昨日のことのように蘇ってくるのである。甘酸っぱい思いで胸がいっぱいになる。

それは私が小学校二年生の頃だった。運命の人と出会ったのである。彼女の名は、「すみれ」。彼女は花のように美しく、輝いていた。しかし、彼女は普通の少女とは少し違っていた。とんでもない秘密を持っていたのである。

（次号につづく）

# 意気込み! インタビュー

この日盛俳句祭が始まるにあたって、事務局長の相場洋威さんにお話を伺った。

## 事務局長　相場洋威さん

今年は二年目ということですが、前の年より緊張感あり、苦労ありでした。去年からのリピーターの方たちに新規性を感じて頂きたい、また参加をしたことのない人達に俳句祭に参加して頂きたいという思いがありましたから、それを達成するのはとても大変でしたね。

今言いました新規性ですが、「今年の俳句祭はこんな新しいこともやっているのか。」と言って頂くべく、全国俳誌展や俳書古書市、高原列車吟行コースなど去年とは違った新しい試みをいくつか行いました。そういった試みをチラシだけでまちの方々に伝えるのは、なかなか大変でしたね。

小諸が「俳句のまち」であることは、こういった行事が行われることで浸透されて来ているので、沢山の方に参加をして頂ければと思います。皆さんが結社を越えて俳句を作り、そこでいつもとは少し違った魅力を感じて頂ければいいなと思っています。

この俳句祭は、各町のまちづくり委員会に協力して頂き告知をしているという。こうして俳句祭は開催され、今年も多くの参加者でにぎわっている。

このまちは俳句のまちなので、伝統が続くように十二月のお祭りでは子供たちに俳句を詠んでもらったり、今日いらしている本井先生には年に五回ほど俳句の講座を開いて頂いているそうだ。当日も沢山の方に御来場して頂きたいと、実行委員一同願っているとのことだ。

実行委員の方々の、俳句祭成功のための努力やそれに掛ける想いが感じられたお話だった。（相原）

# 三泊四日 小諸生活

## この場所に来て、私が感じたこと

軽井沢から電車で五駅。小諸駅が近づくにつれ、景色が少しずつ変化していくのを電車の中から感じる事ができる。小諸が近いようで遠いイメージを受けた。

駅を降りて真っ先に目に入ったのが、野菜だ。駅中でその日採れたての野菜を販売している。ごく自然と人々の日常に入り込んでいるのだ。しかし、私たちにとってはその光景がすごく奇妙であった。奇妙というよりは新鮮だった。

私たちが四日間滞在させていただく与良館へは、徒歩十分。駅を出ると、緩い坂道になっている商店街をひたすら直進した。歩いていると「どこから来たの」と声を掛けてくれる人がいる。「今年は暑いから熱中症に気をつけてね」自然と笑顔になった。商店街を抜けた後も坂道は続く。三十分くらい歩いたのではないか、そして辿りついた。

そこには懐かしい風景が待っていたのである。木造の建物、風鈴の音、迎えてくれる温かい笑顔、扇風機の音、蚊取り線香の香り。ガラガラドアの向こうには広い空間があり、その奥には今にも横になりたくなるような畳が広がっている。東京から二時間離れただけ。何か大きく心動かされた。到着してまもなく、きゅうり、とうもろこしを頂いた。冷たいお茶も出して頂き、自分たちが汗だくだったことも忘れていた。

夕方、市民会館から帰ってくる途中、通り雨に合う。一本の傘を三人で分け合いながら、与良館まで歩く。決して急ぐことはなく、ある意味雨に打たれることを楽しんでいた。戻ってくると、近くに住んでいる方々が集まっていて、お茶会を楽しんでいたのである。「どうも、どうも」「雨降ってきたね」と、以前から私たちの事を知っているかのように話しかけてくれる。嬉しかった。

そして、一階の畳には私たち全員分の布団がおいてあり、久しぶりに修学旅行の気分を味わえた。「じゃあ、女子は二階まで布団運んで」高校生の時にみんなで布団の取り合いになったことを、一瞬思い出した。

食堂への道、所々に「小諸・日盛俳句祭」という看板を見かける。私たちにとって「俳句」は遠い存在だ。しかし、この三日間小諸に「俳句」が好きな人、俳句ロマンチストが集まる。そのお手伝いを私たちはするのだ。新しい世界への期待を覚えた。（崔）

## ここで一句

小諸みち
いまなき故郷に
つらなりて

私は長野県茅野市で生まれ育ちました。帰省する機会もないですが、縁あって小諸を訪れました。日差しの強さ、乾いた空気、高い青空。すべてが私の故郷を思い出させてくれます。（馬場）

**編集後記**

創刊号は楽しんでいただけたでしょうか。私たちの視点から見た「小諸」をありのままに表現しました。小諸にはまだまだ隠れた魅力があるでしょう。引き続き５号まで発行しますので、お楽しみ下さい。

# 密着！吟行の旅

## 筆すすむ　言葉が実る　りんご園

今回、私はりんご園コースに同行した。参加者は私を含め、五人。他のコースに比べると少し寂しい気もするが、寧ろゆっくりと句を詠むことができるだろうと出発した。目的地である松井農園は釣り堀やキャンプ場、りんご資料館など様々な場が設けられており、ロッジの様な建物はのんびりとした雰囲気を醸し出していた。日差しが強いため貸し出されている麦わら帽子が、農園とよく合っている。

りんご園コースを選んだのはなぜか。俳句歴十年の山浦さんの話の中で、「自然が多くシンプルな方が、俳句が書きやすい」という言葉があった。自然を感じることが良い俳句を生み出す極意のひとつなのか。山浦さんのお話では高峰公園もオススメなのだとか。

りんご園ではカブトムシも販売しており、コース唯一の男性、大塚さんが早速俳句を詠んでいた。帰り際の青りんごにかじりつく姿もとても似合っていた。自然をみて俳句を詠むだけでなく、その土地の名産を味わうことも大切なのではないかと感じた。例えば、松井農園のりんごジュースは濃厚な風味とさっぱりとした後味が楽しめる！

りんご園内では、皆さん思い思いに歩き風景を眺めていた。ここで、俳句歴三年（それでも初心者なのだとか）の小山さんに俳句を詠む難しさを聞いた。小山さんは「俳句の表現や季語は多岐にわたり、電子辞書が手放せない。生みの苦しみを感じ、良い俳句を生み出せないという壁にぶつかることもある」と答えてくれた。俳句の奥深さは底が見えない、追求すればするほどのめり込んでしまう魅力があるのだ。

その俳句と小諸の繋がりに親密さを感じたのが、北原さんの「俳句を始めたきっかけは、回覧板」という言葉である。駅にも投句箱が設置されているなど、身近に俳句と触れあう場面がある。それが、小諸といえば俳句という伝統を誕生させる重要な要素なのだと感じた。

りんご園コースに同行し、季語などの表現の難しさはあれ、俳句が参加者の皆さんに愛されているとわかった。俳句への愛が俳句祭という大きなイベントを盛り上げるスパイスなのだろう。こもろ・日盛俳句祭もまだ初日、愛に溢れた俳句がたくさん生み出されていくのが楽しみである。（横尾）

こもろまん

2010年
（平成22年）
8月1日
日曜日

こもろまん編集部
発行所：小諸市 CC
komoroman@vanotica.net

第二号

## 記念募集句
## 投句用紙、絶賛販売中！
## （二句千円）

今回の句会用の俳句とは別に、当季雑詠で、記念募集句を行っております。

1日目は、奥坂まや先生、2日目は片山由美子先生に選者となっていただきます。

結果は翌日の10時に、コミュニティセンター受付所で発表されます。入選した方には、選者の直筆作品が送られます！

## ロマン小説　第二話
# すみれ

すみれと私の思い出は数多い。ここ小諸には「こもろすみれ」という八重咲きの大変珍しいすみれがある。花の色や葉の形は普通のすみれと変わらない。しかし、よく見ると花びらの数もまちまちで、一つひとつ見せる表情が異なる変化に富んだすみれなのである。すみれは私と会ったらどんな顔をするだろうか。あの頃と変わらない笑顔をまた見せてくれるのだろうか。

私たちの夏の思い出の始まりは、小学校生活最後の夏休みが迫ったある日の放課後のこと。私は忘れ物を取りに学校へ戻り教室のドアを開けた。その瞬間、ベランダからひとり校庭を眺めている女子が真っ先に目に飛び込んできた。私は思わずはっとした。自分の頬が熱くなるのを感じ、それと同時に高鳴る胸の鼓動のせいで、うるさく鳴く蝉の声なんかこれっぽっちも耳に入らなくなっていた。目の前にあるのは美しい後ろ姿。それはすみれだった。

私は何の迷いもなく彼女の隣に並んだ。何が私にこうさせたのはわからない。これといって話題も、用事があるわけでもない。しばし沈黙の時が流れる。夏の夕日を浴びた二人の顔に心地よい風があたる。最初に口を開いたのは彼女の方だった。

（次号につづく）

# 冷涼、浅間山散策

私は六コースある内の一つ、浅間山荘コースに行った。浅間山をちょっとしたハイキング気分で歩きながら、山の自然を味わえるコースだ。

バスの中は、高浜虚子のお弟子さんを祖父に持つバスガイドの小山さんの朗らかな挨拶で、終始明るい雰囲気だった。既に書き始めている人がいたり、会話の中に突然詠んだりする人もいて、皆さんかなり嗜まれている様子。そのバスの中でなんと、記念販売されている俳句祭Tシャツにも俳句が詠まれていたことを知った。

延びるぞと
いわれて求む
夏衣

着ると十年寿命が延びるという願掛け（？）をしているらしい。確かに着ると元気になる…かもしれない。

ちなみに私は浅間山荘と聞いてすぐ赤軍の浅間山荘事件を思い浮かべたが、それとは場所が違うらしい。その浅間山荘は軽井沢方面にあり、こちらは江戸時代からある「由緒正しい」浅間山荘なのだそうだ。

ミニバスで三十分かかる所を、運転手さんの頑張りにより二十分程で到着。降りると、山の冷気がひんやりと心地よい。浅間山は夏真っ盛りで、濃淡様々な緑が溢れ、夏の強い日差しを受け止めていた。

バスを降りると同時に意気揚々と歩きだす参加者の皆さん。手には季語帳、俳句帳、図鑑らしきものを持っている人もいた。思い思いに草花を観賞し、川の音を聴き、談笑し、俳句を詠む。

「『苔』は一年中生えているから季語にはならないけど、『苔の花』は季語になるんだよ」と赤い小さな花（のようなもの）をつけた苔を指しながら説明して頂き、「橋の名前には漢字とひらがなのものがあって、京に近くなると漢字表記が増える」という豆知識や、俳句の作り方も教えて頂いた。

橋を渡り、いよいよ本格的なハイキングコースに足を踏み入れようとしたところにすぐ出発の声が。

「時間が足りない！」という皆さんの可愛らしい訴えに対し、小山さんは「後のアンケートにたくさん書いて頂ければ、次回から善処します（笑）」と答えていた。私にとっても、とても心地よいスポットだったので、アンケートに記入したいと思う。

（田中）

# 句会

## 穏やかな時間、大人の世界

例年以上の暑さを見せる中で、「こもろ・日盛俳句祭」の一日目。

特に印象的だったのが、参加者同士の繋がり。一緒に応募した者同士の仲の良さはもちろん、名簿の中から知人や友人の名前を見つけると、嬉しそうな笑顔を見せていた。おそらくそれほど頻繁に集まるわけではなく、こうした句会の際に顔を合わせ、俳句を詠みながら互いに近況を報告し合うのだろう。共通の趣味を持つ仲間と過ごす時間は、やはり居心地がいいに違いない。これから巡る小諸の街に想いを馳せながら、皆楽しそうな表情でバスへと乗り込んで行った。

午前中は思い思いの場所へと吟行に赴いた参加者たち。午後からは、三カ所八会場に分かれ句会が開かれた。

俳句は高校での歴史の授業以来という私にとって、初めての句会はとても新鮮な発見の連続だった。開始時間の少し前に会場に入ると、参加者は皆黙々と俳句を作っていた。その静けさに、写真を撮る時のシャッター音が響く。手元には電子辞書や、俳句の教科書のような本が置かれて、一語一句丁寧に綴っている様子が伺えた。

参加者の一人、立川市から来た佐藤みつをさんにお話を伺うことができた。昨年に引き続き二度目の参加というリピーター。去年訪れた際に主な名所はほとんどまわったため、今日はあまり出歩かなかったそうだが、それでも早々に五つの句を完成させていた。他の参加者の皆さんが句を詠む姿も、真剣そのもの。「気持ちが入る」とは、こういうことを言うのだろう。

自己紹介をする際にもユーモアを忘れず、講評にもどこか風情がある。柔らかく、穏やかな時間。これが句会というものなのか。なんだか大人の世界を知った気分だ。（水谷）

## ここで一句

夏来たる
移り行く斜の
まつりかな

二年目のこもろ・日盛俳句祭が始まりました。私にとって、小諸で過ごす二度目の夏になります。

まちは一見変わっていないように見えます。しかし、昨年もご一緒したスタッフ・参加者の方々との再会は、まちも私も確実に一つ年をとったことを気付かせてくれました。

陽のそそぐ坂のまちに、今年も夏がやってきました。

（青木）

**編集後記**

俳句を作る参加者の皆さんと同時に、私たちも、第二号の発刊に向けて、取材を進めていました。後ろ姿を追うことで、皆さんの俳句への情熱は、かわら版作りへの励みとなりました。（飯田）

2010年
（平成22年）
8月2日
月曜日

こもろまん編集部
発行所：小諸市 CC
komoroman@vanotica.net

第 三 号

# 句でわかちあう幸せ

## ――特選に添えられた想い――

「――特選、いただきました」

〝句会〟がどんなものかも知らずに足を踏み入れた私たちに聞こえてきたのは、そんな凛とした声だった。

参加者が順々に特選句を読みあげていく。自分の番の最初に自ら名乗り、「特選」と告げ、いただきました、と添える。私には、「いただきました」が、気品を持ったやさしい言葉として聴こえた。

選ばれた側が「選んでいただきました」ではなく、選ぶ側が口にする敬いが、作者と俳句自体への敬愛の念を思わせる。なんとも文化的で素敵なやりとりである。

それぞれの句に述べられる感想も、俳人らしく、とてもスマートだ。部屋はしんとしているのに、決して張りつめてはいなかった。

人は、句詠みであるだけでなく、同時に読者であり、さらに選者にもなる。誇りを持って名を告げ、誰かの大切な想いや風景に、そっと共感する。映画評論や書籍レビューではあまり見られない尊重が、そこにはある気がする。

元々詩を書かれていたスタッフ俳人の土肥あき子さんは、「自分には五七五の長さが合っていた」という。「詩や小説は、自分で終わりを決めるから、全て自分によって決まる。でも、五七五と決められた中だと、どんな受け取り方をされても、そういう取り方もあるよね、と思える」

俳句をやっていて最高に幸せだと思うのは、〝一字一句違わずに自分の句を覚えてもらえること〟だそうだ。「小説じゃほぼあり得ないでしょう？」

――確かに。誰かが諳んじている場面に出会ったとしたら。私もそれだけで感激して泣いてしまいそうな気がする。（小林）

## 瓦版第二号配られる

### あざやかに蘇る数時間前の体験

二〇一〇年八月一日一八時、俳句祭の初日が終わり、予定よりも少し早く懇親会が始まった。私は乾杯に居合わせることができず、会場に着いた時にはすでに参加者の方々が交流を始めていた。

俳句の世界には「結社」というコミュニティがあって、その結社ごとに俳句の読み方や運営の仕方などが違い、それぞれが文化を持っている。句会の後の懇親会は、異文化交流の場になっていた。

そんな中、私たち「こもろまん編集部」（慶應義塾大学 加藤文俊研究室）が発行するかわら版『こもろまん』第二号が配られた。初日の吟行や句会の様子が綴られた文章を、じっくり読んでくれる人、さっと眺める人など様々。感想を聞きたくて、私はメガネをかけ直して読んでいる山浦勤司さんに話しかけた。

「紫苑の会」に所属している山浦さんの俳句歴は1年ほど。植物を季語に選ぶことの多いこの結社でガーデニングを趣味にもつ山浦さん。この日の午前中は浅間山に吟行に出掛けたそうだ。『こもろまん』第二号の裏面にはそのことが書かれていた。苔の花が夏の季語であること、時間がなくなって焦ったことなど、「ポイントを押さえていてさすがの記事。生々しく思い出せていい」と感想を聞かせてくれた。

この俳句祭での交流の体験を持ち帰って、それぞれ自分の結社に戻っていく。この瓦版が、交流の体験を鮮やかに思い起し、ロマンをふくらませるきっかけになることを願う。（臼井）

**ロマン小説　第三話**

## すみれ

「わたしね、もうすぐ引っ越すんだ。」彼女は呟いた。

「わたしね、みんなには本当のこと言えなかったんだけど、実は病気なの。それで、東京の病院に行かなきゃいけないの。この街とお別れするの、やっぱり寂しいなあ。」

「だめだよ……！」私は思わず言葉を発していた。

「でも、いつか帰ってくるんだよね？」

「……。ごめんね、今まで黙ってて。」彼女は私から目を反らし、窓の外を見た。その先には、一輪の遅咲きのこもろすみれが咲いていた。

「きれいね。この花の花言葉、知ってる？」すみれは、はかなげな笑顔で私を見た。

「この花の花言葉はね、『小さな愛』っていうんだって。」

私は小さく頷いた。首に滴る汗が、少し気になった。

「これ、あげる。わたしのこと、覚えていてね。」そう言った彼女の白く細い手には、すみれの押し花のしおりが握られていた。それは、彼女がよく使っていたものだった。

私はそれを受け取った。私の口からは、まだ言葉が出てこなかった。目の前にいるすみれの凛とした姿と、彼女の透き通った声を、頭の中で繰り返し反芻していた。

すみれは少し困ったような顔で最後に私に笑いかけると、「またね。」と言って、目の前から立ち去った。立ち尽くす私には、すみれの表情が焼き付いていた。

これが、すみれとの最後の思い出だ。

（次号につづく）

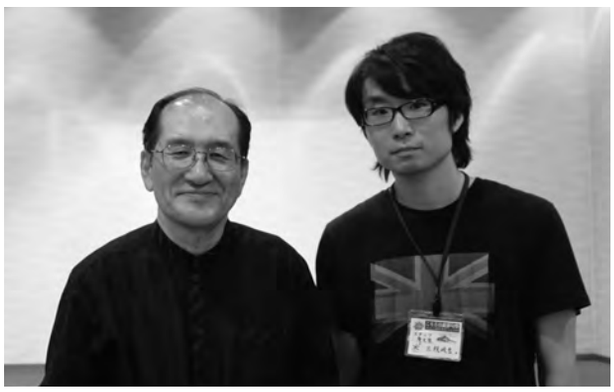
# 俳句を詠むこと

## 「ヒューマニズムじゃ、だめなんだよ。」

暑さもやわらいできた、俳句祭一日目の夕時。『虚子と信濃』という題目で、宮坂静生さんの講演会が行われた。

講演会では、虚子が昭和十九年、太平洋戦争の戦火を避けて、小諸の地にやって来て詠んだ句の紹介を中心に、宮坂さんの虚子に対する思いや、「俳句とはなんであるか」という問に対して語る一面もあった。

公演会後、宮坂さんに質問をさせていただく機会があったので、このかわら版『こもろまん』という名に関連して、俳句に対する想い―ロマンに関係した質問をいくつか投げかけてみた。



――普段、俳句を作る際にどのようなことを想っているのでしょうか？

僕は、小諸だったら小諸といったように、土地の顔を見つめて、普遍性というよりも、その土地の特徴を的確に表現することが大切だと思ってる。だから、あまり（他の）人に分かってもらおうということよりは、一番自分が親しみを覚えるようなことを深く感じて、詠むことが大切だね。

――これから俳句をより一層、広めていくためには、各人がどういった想いを持っていけばいいでしょうか。

一人一人が自分の生きている、今よって立つ足場、大地、自然…そういうようなものを見つめると、ヒューマニズム（人間中心的）じゃだめなんだよ。やはり、人間を含めた上で、もう少し大きな目をもたなきゃいけない。我々はあまりにも人間中心的にやってきたために、今日いろいろなひずみがでてきている。だから、人間を大きくとらえるような、そういうモノの見方。ある意味では、生きている自然の中の自分をつかむということだね。あまり、人間中心にならない。まわりの自然みたいなものがあってこそ、自分が生かされている、そういう見方をするということだね。

私は自分で質問を投げかけておきながらも、宮坂さんの、自然における自分を意識する、といったような大きな視点の話に驚いてしまった。奥深い俳句世界の新たな一面を知った。（三枝）

## 「特選」の意味するもの

### ～はじめて見学した句会で垣間みられた俳句の文化～

先代から受け継いできた俳句の文化。それは五七五という形式だけではなく、句会で垣間みられる一瞬の表情や言葉にも表れる。

「○○特選、～」「まぁあ！！！」最初の五文字を読み上げると、どこからか歓声が聞こえる。信じられないという表情だ。選ばれたその句を詠んだ方は、じっとこみ上げたものを隠しきれない様子だ。「今日はうれしくて眠れない」と一言。その喜び方からきっとこの方にとってはじめての特選だったのか、もしくは特別な思い入れがあるのだろう。その光景が、幼い頃はじめて作文の賞をもらった時のシーンと重なった。このようにその方の気持ちのよい反応に特別な印象を持ち、私たちは句会の傍らにいた。

自分の句が選ばれることは特別なことだ。しかしながら一句一句、特選が発表されるたびにもれる感嘆の声が、俳句会にはじめて見学する私にはとても特別な光景に思えた。そしてその夕方に、本日の記念募集句の選者である、奥坂まや先生にお会いすることができたので実際に見た句会での様子を話すと、奥坂先生はこのようなお話をしてくださった。

もともと俳句は姓を隠し、名だけを公表し句会に参加した。それは名字による身分や出身で、句を評価するということを防ぐためであるという。そして俳句は季語や五七五といった共通の世界観を共有し、誰に対しても平等に開かれている、そんな文化がある。あらゆる偏見を削ぎ取り、純粋に優れている句だからこそ評価されるということが、共通の認識としてある。そして初めての特選かどうかに関わらず、句を詠まれる方はみな俳句において自分の句が「特選」になるということがどれだけ名誉なことかを知っている。だからこそあのような喜びにつながるのである。

選ばれるという行為が、単純に競争を表すものではなく、身分や生まれを超えて良いものは良いと賞賛する俳句会の精神を反映している。今日もどこかで「特選」が選ばれ、誰かの感嘆が聞こえてくるだろう。（落合）

＊昨日八月一日分記念募集句講評は、受付右手の掲示板にてご覧ください。

## ここで一句

### 部屋に来る　蟻さえ風情　自然の地

小諸に来て三日目を迎えました。

夜、涼しくなってきた頃、お世話になっている与良館に虫が迷いこんでくることがあります。東京ではきゃあきゃあと大騒ぎかもしれないのに、自然豊かなこの地では、不思議と虫さえ季節を感じさせてくれる仲間に思えます。あら、いらっしゃい、なんて。改めて、この地に来ることができたことに、最大限の感謝を。（小林）

## 編集後記

### ～小諸さまよい歩き～

私たちはかわら版制作以外の活動として、「さまよい歩き」を行った。私たちの活動は決められた環境での交流を主とするが、偶然の出会いが生まれることも、旅の醍醐味ではないだろうか。そんな思いのもと、アドバイザーの木村健世さんの協力をもって、「小諸さまよい歩き」を始めたのである。ルールは簡単で、二つのサイコロを振り、示された方向や動作に従う。私たちは虚子散歩道周辺をさまよい始めた。遠くに行く人もいれば、同じ場所を往復する人もいる。印象に残ったのは、人とすれ違うことがあまりないので、出会う瞬間そのものがとても価値のあるものになる、ということである。小諸のまちで人々と触れ合うこと、その一つ一つが濃密な出会いだと感じた。（多山）

バックナンバーはこちらのURLで公開しています。
小諸キャンプ　http://vanotica.net/komop2/
慶應義塾大学　加藤文俊研究室
vanotica

2010年
（平成22年）
8月2日
月曜日

こもろまん編集部
発行所：小諸市 CC
komoroman@vanotica.net

第四号

# 共感を呼ぶ十七文字

## ――よくブラウスとスカートに例えるんです――

本日の午前十時、小諸市コミュニティセンター入り口にて、一日目の記念募集句の入選発表が行われた。記念募集句の投句用紙を販売していた私たちも、その用紙の行方が気になっていた。どんな句が選ばれるだろうか。

予定時刻の十分ほど前から、入選発表を見に参加者が少しずつ集まってきた。一日目の選者は奥坂まや先生、笑顔が素敵な先生だ。先生独自の視点から特選一作品、佳作十作品、計十一作品が選出される。

そしていよいよ、スタッフの手で入選句が書かれた紙が貼り出された。待っていた参加者たちは掲示板に駆け寄り、入選句を眺めながら笑顔をこぼしたり、出来映えに唸ったりしていた。見事特選に選ばれたのは、鎌倉市の山下桐子さん。

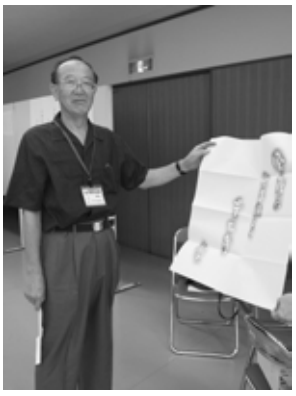
山国の　雲の変幻　鬼やんま

『『変幻』という言葉が山国らしく、雲の特徴をよく捉えている。また、幻という文字が入っていることで雲を讃えている印象を与えるそうだ。『鬼やんま』もまた、山国にいる一番大きなトンボである。この小諸で詠んだからこそ生まれたであろう二つの言葉が、ブラウスとスカートの素敵な組み合わせのように互いに良さを引き出し、季語の輝きを生み出している」奥坂先生は句についてそうお話して下さった。実際には詠み手の目に映らないものが、言葉によって見えてくる。

受賞者の一人、中村哲明さんは、暑さをしのいで座っている様子を「座して」と詠んだ。中村さん自身もそれほど深く考えず、感じたことをシンプルに詠んだらしい。だからこそ、俳句の中の情景に周りは共感する。

現場に行き、見て、聞く。五感で感じたことが、そのまま伝わるような言葉。芭蕉の名句がいまでも古びないのは、芭蕉が抱いた感覚が、私たちにも共感できるからだ。五感を通じてという部分は、芭蕉の時代から変わらない。

このインタビューを通して、新しい土地に出向くことの大切さと、新たな言葉との出会いの可能性を感じた。



これまであまり接点のないと思っていた俳句は、この場所で取材をし、発行しているこのかわら版を始めとする、私たちの活動と大きな共通点があった。（青木・水谷）

**ロマン小説　第四話**

## すみれ

初恋の甘酸っぱい思い出が蘇るとともに、今のすみれに思いを馳せてしまう。彼女の病気はちゃんと治っただろうか。いまはどこで暮らしているのだろうか。もしかしたら、もう私のように家庭をもち、幸せな生活を送っているのかもしれないなぁ、なんて。たかが小学校の初恋に自分がなぜこんなにも執着するのか分からなかった。私もとうとう思い出に浸る年になってしまったか…。ふと我に返り、そんな自分を笑ってみせた。

そう、今はもう叶わないこと。結局彼女がこの街に戻ってくることはなかったのだから。

じりじりとした日差しが肌に注ぐ。田んぼは風にそよめき、青い夏の匂いが鼻を抜ける。この街を離れ、東京の都会暮らしに慣れていた自分には、忘れかけていた小諸の夏が懐かしく思えた。

「田中くん…？」

後ろからふと呼び止められる。懐かしい声で一瞬で誰か分かってしまう。振り向くと、やはり屈託のない笑顔がそこにはあった。あの頃と変わらない笑顔に、四十年の月日を忘れてしまいそうだった。ふと気付く、私が欲している「家庭」でも「仕事」でもない何か。この夏、故郷の小諸で私が求めている「何か」に出会えるのではないのかと。

（次号につづく）

古久清食堂

私たちの「小諸の味」
と言えばここ！
ボリュームたっぷり、
**満足度１００！**

# マンズワイン 小諸ワイナリーへ

## ー川戸美佐子さんとの出会いー

当初、私は六コースの中の「もも畑コース」へ向かおうとした。満車と聞き諦めようとしたが、「マンズワインコースなら空いているよ」とお聞きし、急遽予定を変更した。参加者は私を含め三人。そのうちの一人が川戸美佐子さんだった。

バス中の会話は、私にとって別世界であった。走っていた道路が北国街道であり、小諸の人口が四万五千ということ、小諸で咲く花は色鮮やかなことを、この会話で知った。参加者は私とは違う視点を持っている。私以上に世界を綺麗に見ている印象を受けた。会話と窓の外に映る景色を楽しんでいるうちに、「マンズワイン小諸ワイナリー」へ到着。

そこには一面に広がるぶどう畑。その中でも、皆が真っ先に向かった場所が「万酔園」。私も後を着いて歩く。門をくぐりぬけると丁寧に手入れされている庭園があった。私がのんびりと散歩している時、川戸美佐子さんが少し遠くですごく穏やかな表情をし、花を見つめている姿が目に入った。そして何か思いついたように、メモをとっていた。私と同じ時間、同じ場所にいながらも、違う世界を楽しんでいるように見えた。その事に不思議と魅力を感じた。

そこから再びバスに乗り「富士見城跡」、関東の富士見百景、と言われる歴史の広場へ向かう。山を上がるにつれ、小諸のまち全体を見渡すことができる。まちの半分以上畑でできていることがよくわかる。

「考えたら昔の人はすごいよな。こんな山奥まで畑つくったんだよ。畑耕して、ゼロから食料つくって、水も川から汲んで、火も毎回ゼロから熾して。五十年生きたとして、二十年は「食べる」ことに費やしてるな。でもその中で「俳句」っていう一つの芸術を生んだんだよね。そう考えると、今は五分でご飯作れるのに、どれだけ時間を無駄にしてるんだろう。」参加者のさりげない言葉に、毎回心動かされる。

バスが止まると、四十分後に集合と告げられる。四十分。その間、川戸美佐子さんに色んな話しを伺った。

川戸美佐子は滋賀県からいらしていて、小諸日盛俳句祭には初参加とのこと。俳句を書き始めたのは一年前で、現在大阪文学大学へ週一回講義を受けに行っている。

「私なんてまだまだよ。他の参加者は深い海で泳いでいて、私はその沖でピチャピチャしてるだけ。でも、いつか作品になればいいかな。なんて、言ってみたり。」

「でもね、小諸は私の憧れの地なの。中学の時に読んだ『初恋』という俳句の背景が小諸だったのよ。だから小諸に足を踏み入れただけで満足なの。」

帰りのバス、ここ数日で見慣れた小諸のまちを見ながらあらゆる考えが過った。俳句祭に集まった方々は、私が知らない時間を過ごしている。「小諸」というまちに来ただけで、幸せを感じる人もいる。本当に参加者一人一人がロマンを持って、この場所に訪れていることを川戸美佐子さんが教えてくれた。（崔）

# 小諸めぐり

小諸の街を歩く。商店街は様々な年齢層の人で賑わっていた。ベンチで新聞を読むおじいちゃん、シャボン玉をしている小学生、部活帰りの中学生。なんとも和やかな風景だ。そのまま、私たちは商店街の坂を下り、懐古園の方へと向かった。そこで、私たちの目に留まったのは「遊園地」の文字だった。こんなのどかな小諸になんとも似つかない…。その驚きと興味から訪れてみることにした。どこか懐かしさを感じる遊園地だった。きっと、小諸には、私たちが気付かないだけで魅力的な名所が沢山あることだろう。ぶらりと散歩してみることで、その土地に対する新たな一面を発見することができると改めて感じた。（神通）

## 編集後記

日盛俳句祭も二日目が終了しました。取材を重ねるうちに、皆さんの俳句に対するロマンが次第に見えてきました。最終号でも皆さんのロマンを追いかけて行きたいと思います。（相原）

## ここで一句

### 未踏地にかほる野菜の新鮮さ

トンネルをぬけて坂道をのぼると、そこには知らない風景。農作業をしていたおじさんが、もぎたてのきゅうりとトマトで出迎えて下さいました。新たな出会いの新鮮さと共に噛みしめました。（相原）

バックナンバーはこちらのURLで公開しています。
小諸キャンプ　http://vanotica.net/komop2/
慶應義塾大学　加藤文俊研究室

vanotica

2010年
(平成22年)
8月3日
火曜日

こもろまん編集部
発行所：小諸市CC
komoroman@vanotica.net

最終号

# 俳句祭ついに最終日

## 暑気の中でもたぎる熱気

三日間にわたって開催されてきた、第二回「こもろ・日盛俳句祭」も、いよいよ終わりを迎えようとしている。今年度の新たな試みであった、全国俳誌展と俳書古書市の開催、小海線高原列車吟行。俳誌と古書がずらりと並んだ展示会場では、まるで俳句の過去と現在が広がっているようで、じっくりと眺める人々の姿があった。高原列車吟行は、予定を越える参加人数で、一番の人気コースとなった。その充実した内容に、去年に引き続いての二度目の参加者も、満足のいく内容だったのではないだろうか。

また、開催二日目には、俳句祭限定のオリジナルグッズの売れ行きがうかがえた。青いTシャツを身にまとい、バックを肩から提げた参加者の姿が見うけられ、俳句祭の盛り上がりが目に見えるようであった。

今年の小諸は、例年よりも暑いそうだが、参加者の熱気が作りだしたのではないかと思えた。

素晴らしい盛りあがりをみせた俳句祭。それは運営側の惜しみない努力と、沢山の俳人たちの想い無しには実現しなかっただろう。

私たちは普段あまり俳句に馴染みがないが、それでも大自然から感じる想いを言葉に込め、一字一句を推敲する姿は、子供のようなわくわくとした楽しさがありながらも大人の品を漂わせていて、素直に魅力的だと思った。

小諸の方々がとても温かく親しみやすいのは、彼らが小諸を、俳句を、自然を、隣人をとても大切に思っているこころが、そのまま人柄に表れているからなのだろうか。

いま、私たちの三日間を振り返って一番印象的だったのが、胡瓜や西瓜を冷やして待っていてくれた与良館の方々、沢山のかりんとうを御土産にくれた食堂の方、美容の話で思わず盛り上がってしまったお風呂で出会った女性、かわら版が発行されてすぐ取りに来てくれた参加者の方、関わった人々すべての笑顔だ。ご近所での付き合いが広く、地元らしい和気藹々とした雰囲気が出つつも、決して私たちを"よそ者"として排除せず、同じ輪の中に迎え入れてくれた。

都会の空気とは全く違う小諸という場所に、短い間ながらも触れて、入ることが出来て、本当に良かったと思う。ありがとうございました。（飯田・田中）

## 「誠」の精神

開催二日目、「亜浪と俳句」という題目で、大串章先生の講演会が行われた。臼田亜浪の作品紹介、生涯や信念が語られたが、最も印象に残っているのは「誠」である。亜浪は、「私の俳句を求むる心は、誠を念ずる心である」と言っている。道を求める心によって、人は自ずと俳句を詠むようになり、道に近づくことができるのである。

私は普段俳句を詠むことがなかったが、この三日間の小諸での活動を通じて俳句を詠むことや互いに分かち合うことが単なる趣味ではなく、自らを高める重要な機会になると感じた。私にも好きなことに熱中して、心を蝕んでいる邪念や迷いが取り除かれるように感じた経験がある。それが単なる趣味ではなく、生涯必要なものであるように、俳句は精神を高めることにつながるのであろう。（多山）

ロマン小説　最終話

## すみれ

「す…水野さん？」

私は、ただ彼女の名前を呼んだ。呼ぶことしかできなかった。もしこれが数年ぶりの再会だったら、「大人っぽくなったね」なんて気の利いたことも言えるのだが。四十年という長い月日は、お互いを少し大人にさせすぎた。

蝉の鳴き声が響く。彼女が微笑みながら、一歩一歩ゆっくりと近づいて来る。その歩調に合わせるように、二人の時計の針がゆっくりと巻き戻されていく。近づくほどに、照りつける太陽が熱く感じる。

そして互いの人生を優しくなぞるように、私たちは話し始めた。彼女がすでに結婚し、小諸から数キロ離れた隣町に住んでいること。「百合」という娘がいること。娘のことを嬉しそうに話す彼女は、愛情に溢れた母親の顔をしていた。幸せそうなその笑顔は、間違いなくすみれの笑顔だ。時おり吹く風が、彼女のきれいな髪を揺らしている。

「じゃあ、またね。」

四十年前、彼女から突然切り出された別れ。今度は、私の方から別れを告げた。彼女も「またね」と返した。言葉はあの日と全く同じ。しかし、目を反らすことも、困らせることもない。また会うこともないだろう。

翌日、私は部屋の荷物をまとめ始めた。東京から持って来た、一冊の古いアルバム。懐かしい写真と一緒に貼られているのは、あのとき彼女から貰った、すみれの押し花のしおり。少しの間それを眺めると、心の隅で育ててきた「小さな愛」をしまうように、そっとアルバムを閉じた。

# 句会を愛する人！ こもろマン

今回の句会に携わっていらっしゃる本井さん、常連参加者として親しまれているとよ田さんにお話をうかがった。

## 主催側としてご尽力されている 本井英さん

「こもろ・日盛俳句祭」の中心人物である本井先生。お忙しいにも関わらず、私たちのインタビューに快く応じてくださった。

その中で特に印象的な言葉がある。

「俳句とは深いものは深く、浅いものは浅い。無理に奥深い俳句を詠もうとしてしまうと俳句は難しいという印象が根付いてしまう。だから学校教育に俳句を持ち込んではいけない。」

これは先生が教育現場に携わっておられたからこその言葉であろう。俳句に興味がない先生が無理に教えると、生徒たちも俳句を詠むことが途端につまらなくなってしまう。そうして俳句が誤解されてしまうのであれば、下手に教育にもちこまなくていいというお考えなのだ。

私も中学生時代に授業で俳句を教わってきたが、この俳句祭を機会に、吟行に同行したり句会の様子を取材させていただいたことで、はじめて「俳句」というものに触れることができたと思う。

また、これからの活動にも意欲を燃やされている。

「全国の俳句を詠む人々のことを、まだ馴染みがない人々にどんどん伝えていく活動をしていきたい。」

来年は、今年はじめた全国俳誌展と古書販売のさらなる発展に注力されるそうである。（横尾）

## 今年もご参加されている とよ田三茶さん

句会二日目は、とよ田三茶さん（林家木久扇師匠）が前日に行われた円楽襲名式を終え、駆けつけてくださった。

三茶さんから、普段なかなか聞くことのできない俳句に対する貴重なお話を伺うことができた。

「ぼくは特に俳句の帳面を作っていないんだよ。その代わりにこのアイディアノートをみながら原稿を書いてね、おいしかった味噌餃子のこととか（笑）」

そのノートは様々な場面で開かれる。ときに地下鉄の中で、ときには浅間山にて。そこに書きためられていったものが、句会で詠まれたような作品へと繋がっていくそうだ。

三茶さんの"視点"はかたちを変え、大喜利での小話や俳句となって、私たちの日常に彩りと笑いを与えてくれるのであろう。（落合）

## こもろまん句会

慶大生が俳句会を行いました

日盛俳句祭もいよいよ最終日。今回、この「こもろまん」の取材で見学させていただいた俳句会に感化され、私たちも俳句会を行ってみました。私たちのゼミの加藤先生、本井先生、相場先生、学生の四者の特選をここに記載します。

**本井英 特選**

蝉が鳴き夏の終わりがまだ見えず　崔

季重ねの句ですが、「夏」といふ季節の不思議な不安定性が読めてゐると存じます。（本井）

**加藤文俊 特選**

まだ夜明け霧を集めてまち涼し　香川

今回、じぶんにとって一番印象的だった風景がそのまま詠まれていたので、迷わずえらびました。

**相場洋威 特選**　**学生 特選1**

水桶に浮かぶきゅうりの青眩し　馬場

小諸に来た体験からにじみ出たもの。（相場）

与良館で食べたきゅうりの味が思い浮かんだ。"青眩し"という情景描写が鮮やかな色彩を上手く引き立てていると感じた。（多山）

**学生 特選2**

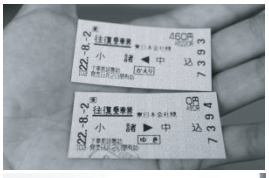
影さがす日盛る夏の坂道に　森部

小諸の情景がよく思い浮かぶ。小諸の特徴をよくつかんでいる。炎天下、汗をたらして坂道を昇る様子に共感した。影をさがしても実はほとんど見あたらない。（石山）

号外
2010年
（平成22年）
8月2日
月曜日
こもろまん編集部
発行所：小諸市 CC
komoroman@vanotica.net
特別号

# 高原列車の旅へ

## 雄大な自然を味わいながら



待ちに待った高原列車の旅がいよいよ始まった。出発地点のこぢんまりとした小諸駅構内には新鮮でリーズナブルな野菜が数多く即売会のように並び、私たちの興味をそそる。参加者約三五名、切符を往復分購入し列車に乗り込んだ。

小海線は、別名八ヶ岳高原線と呼ばれ、小諸から小淵沢まで続いている。三両編成で、ボックス席の座席がほとんどで、ドアは手動で開け閉めする、といったどこか懐かしいような、時間の流れがゆっくりになったような気分にさせる列車である。我々の目的地、中込（なかごみ）までの二五分間、車窓から移り行く景色を楽しみつつ、各々が会話に花を咲かせていた。

中込駅に到着後、日盛会の旗を先頭に、鮎釣りシーズン真っただ中の千曲川沿いまで歩く。皆さん、道の途中にある建物や植物も見逃すことがない。手帳にメモをとったり、写真を撮ったり、道草しながら先を目指していく。会話もどんどん弾んでいく。

千曲川が目の前に広がる。皆さん思い思いにペンを走らせ、創作活動に励む。川の流れる音と遠くの山々など、長野の雄大な自然がより一層創作意欲を掻き立てているようだった。

さらに先を目指して歩く。出発時は雨も心配されるような曇り空だったが、気がつけば、額から汗が滴り落ちるほどの暑さときれいな青空が広がっていた。田んぼの上を飛び交うトンボ、畑の端に植わったひまわりがこの晴天に映える。私は思わずシャッターを切った。

そうこうしているうちに次の目的地である旧中込学校へ到着。この建物は重要文化財に指定されており、現在日本に残っている洋風の学校建築では最古のものである。残念ながら休館日のため、資料館も含め見学することはできなかったが、しばし木陰での休息時間となった。昼食をとったり、創作したり、記念撮影をしたり、ここちよい風と共に時間はあっという間に過ぎていった。帰りは中込より一つ小諸寄りの滑津（なめづ）駅から列車に乗ることに。ここは単線の無人駅。改札は存在せずホームには小さな待合室がぽつんとあるだけ。「大人数が小諸で清算だと大変だからね。往復分買ってもらいました」スタッフの小山さんの心遣いに胸が温かくなった。

今日にふさわしい天気のもと、皆さんと大変楽しいひと時を過ごすことができ、うれしかった。今度は余裕があれば俳句作りにもしっかりチャレンジしてみたい。

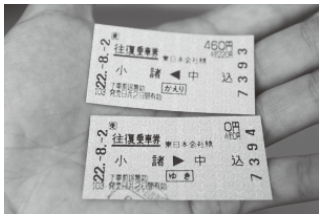
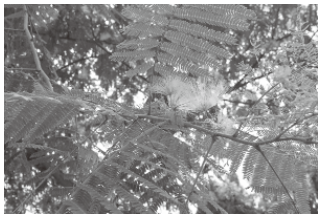
## 昔と変わらない風景と共に

道中での取材に快く応じて下さったのは神山洋さん。今回、こもろ・日盛俳句祭へは初めての参加。神山さんは学生時代から俳句に親しみ、ここ小諸へは奥様の故郷ということもあり、頻繁に訪れているという。しかし高原列車の走る小海線に乗ったのは三五年振り。昔と変わらない自然豊かな景色に久々に来て良かったと話す。

学生時代から仲間と俳句を楽しんでおり、句会や合宿、学園祭などでの思い出が多いと懐かしそうに話す神山さん。他にも私たちが普段知ることができない俳句に関するお話もたくさんお話しして下さった。参加者の皆さんとの交流を通して、また少し、俳句が身近に感じた私なのでした。

神山　洋さん（写真右）

## 編集後記　ますます小諸が好きになりました。

今年もたくさんの方々のご協力があって、無事に第4号、そして号外まで発行することができました。感謝の気持ちでいっぱいです。いつもすれ違うたびに激励の声をかけて下さり、とてもうれしく思います。最終日も、全力を尽くしていきますのでご協力よろしくお願いいたします。

# 高原列車　吟行写真館